

中島敦「ノート第十一」考

— アンドレ・モーロア『PROPHETS and POETS』からの
英文抜書集について —

橋 本 正 志

はじめに

中島敦の「ノート第十一」は、フランスの作家アンドレ・モーロア (ANDRÉ MAUROIS, 1885-1967) の評論『PROPHETS and POETS^①』(英訳書)の中から、主にイギリスの作家G・K・チェスタトン (1874-1936) を論じた部分を抜粋したものである。中島がチェスタトンの著作から大きな影響を受けていたことはすでに指摘^②したが、中島はこのモーロア原著の英訳書を通じて、チェスタトンほか英作家の著作の表現や思想に直接触れていたと推測される。

中島の「手帳 (昭和十一年)」には、パスカルの『パンセ』とともに、チェスタトンの評論『Orthodoxy』(1908) などを入手する目的で記された書名と出版社名が残ることから、もとより中島とチェスタトンの著作との関わりは深い。また「ノート第十一」における『PROPHETS and POETS』からの抜粋箇所も多くは、モーロアが『Orthodoxy』の本文を引きながら論じた部分であり、それらを含めてノートに抜粋した背景には、当時の中島の『Orthodoxy』そのものに対する関心の強さが窺える。さらに実際に『Orthodoxy』全体の内容を確認してみると、「山月記」をはじめとする中島作品に影響を与えたと考えられる表現が数多くあることから、おそらく中島は原書も手に取って参看していた可能性が高いと思われる。

このように中島とチェスタトンとの関わりは無視できない。チェスタトンの各書の内容がその後の中島作品に少なからず影響を与えていることから、あらためて中島とチェスタトン両者の繋がりは重視されてよいと思われる。中島文学の成立と展開において、チェスタトンの表現や思想は大きな影響をもたらしていたのではないだろうか。

そこで本稿では、「ノート第十一」におけるアンドレ・モーロア著『PROPHETS and POETS』からの抜粋部分 (とくにチェスタトンの章) を特定し、それらを詳細に分析することで、中島敦に与えたチェスタトンの影響の内実と意義について考察していきたい。

1. 「木乃伊」「名人伝」との関わりから

まず、中島の「手帳（昭和十一年）」には『Orthodoxy』の他にも4冊のチェスタトンの書名が列記されていることに触れておきたい。そのうちの1冊、『THE POET AND THE LUNATICS』（TAUCHNITZ EDITION VOL. 4906, LEIPZIG: BERNHARD TAUCHNITZ, 1929）は中島が実際に手に入れて読んだ可能性もあるため、引用が長くなるが、試みに中島作品の内容と関連があると思われる箇所を取り上げてみる（邦訳『詩人と狂人たち^③』から引用し、参照させていただいた）。何よりも本書名の「詩人」や「狂人」との語は、「山月記」の主人公・李徴の人物像を彷彿とさせるものである。この『詩人と狂人たち』での「何事もけしてあるがままには見えず、見せかけの姿でしか見られなくなってしまった」との一文は、「文字」を「^{ほんもの}本物」の「影のやうなもの」と見る老学者ナブ・アヘ・エリバの逸話「文字禍」との関連で読む場合においても興味深い。以下に「小詩人」であり、「いっばしの大画家」（186頁）でもある青年ガブリエル・ゲイルが「スターキー博士」を評して語る場面を挙げてみたい（下線・引用者。以下同じ）。

「スターキー博士の精神的欠陥は、真実を忘れてしまったことにある。スターキー、君はこのお友達のような懷疑主義哲学を持っていない。実際家なんだ、スターキー君は。しかし、若い頃からひっきりなしに嘘をついていたため、何事もけしてあるがままには見えず、見せかけの姿でしか見られなくなってしまった。あらゆるものの傍らには、その影である偽物が立っている。君は先に影の方を見る。それを見つけるのは目ざとい。何事であれ、人を欺く潜在能力の方へまっ先にとびつく。何物かが何かほかの物として使えるかどうかを、すぐに見抜く。君は曲がった道をまっすぐ行った最初の人間だ。（中略）いつも他人の思いつきを盗んで来たが、盗み方が^{すり}掏摸みたいに素早いんだ。実際、君は人のポケットから考えが突き出していると、掏らずにいられないんだ。そこが君の狂っているところさ。君は利口でいなければ、いや、むしろ、利口さを借りて来なければ気が済まない。それは、時に利口すぎて幸運ではなかったことを意味している。君はならず者の中でも薄汚ない奴だ。牢獄に入ったこともあるんだろう」（「八、冒険の病院」、『詩人と狂人たち』272～273頁）

この『詩人と狂人たち』は「ガブリエル・ゲイルの生涯の逸話」という副題が付されているが（原書では「EPISODES IN THE LIFE OF GABRIEL GALE」）、同様に「弓」の名人の「生涯」を戯画的に描いた中島の短篇「名人伝」にも、他のチェスタトン作品との類似点が指摘できる。これまで「名

人伝」の最後の場面（第4段）については、ほとんどが中島の創作であるとされてきたが、第4段への展開には、かつてパラオで親しく交流した民族誌家・土方久功（1900-1977）の「パラオの勇者」（『パラオの神話伝説』大和書店、1942年11月）の一節が踏まえられている^④。この「名人伝」の末尾で「三度紀昌が真面目な顔をして同じ問を繰返した」（『全集1』446頁）という「妙な話」が語られる場面にも、チェスタトンの短篇「狂った形^⑤」の中によく似た場面があることを重視してみたい。もちろん影響関係を客観的に示す確証があるわけではなく、実際にこうした内容が執筆時の中島の構思にあったかは不明だが、「名人伝」の主人公・紀昌の「唯無為にして化した」とばかり伝わったという後日譚も含めて、いくつか共通点が指摘できるため、やや長くなるが該当部分を挙げてみる。

「あのインド人がわたしに口をきいたとき」とブラウンは座談風な低声で話をつづけた——「そのとき、わたしは一種の幻を見た——彼自身と彼の宇宙全体を幻として見たのだよ。と言っても、彼はただ同じことを三度繰り返しただけさ。彼が最初に言った『なにも要りません』という言葉の意味は、自分は腹の底を見透かされるような人間じゃない、東洋の正体がわかってたまるものか、ということだ。それからまたやつは『なにも要りません』と言ったが、それは、自分は宇宙同様一人だけで満ち足りた存在であり、いかなる神も必要とせず、罪の告白もしない、という意味だとわたしにはわかった。三度目にまた『なにも要りません』と言ったときのやつの眼は爛々と光っていた。で、わたしにはわかった——こいつの言わんとすることは、文字どおりなにも要らんということだなど。つまり、無こそやつ^{じやくめつ}の望みであり故郷であり、やつは酒に焦がれるように無に焦がれ、寂滅こそは、ありとあらゆるものの滅却こそは……」（「狂った形」、『ブラウン神父の童心』所収、203頁）

この場面からは、キリスト教の『新約聖書』における使徒ペテロのいわゆる〈三度の否認〉なども連想されるが、「名人伝」の最後の場面との明らかな影響関係は今のところ見出せない（単に〈三度繰り返す〉という点において共通する場面かもしれない）。ただし、中島のこの時期のチェスタトンやキリスト教に対する関心の強さを考慮すれば、「名人伝」執筆時の中島の着想の元になった可能性も皆無ではないように思われるのである。

2. 「ノート第十一」の英文抜書について

さて冒頭でも述べた通り、中島の「ノート第十一」はアンドレ・モーロアの『PROPHETS and POETS』（ハミシュ・マイルズによる英訳書）の中から、

主にチェスタトンの評論『Orthodoxy』を論じた部分を抜粋したものである。モーロア著の邦訳書『詩人と予言者^⑥』の函によれば、「現代苦を克服する文豪の列伝」と銘打たれており、英訳書にはG・K・チェスタトンの他にR・キップリング(1865-1936)、H・G・ウェルズ(1866-1946)、バーナード＝ショー(1856-1950)、J・コンラッド(1857-1924)、リットン・ストレイチー(1880-1932)、D・H・ロレンス(1885-1930)、A・ハックスレイ(1894-1963)、K・マンズフィールド(1888-1923)の9名の英作家について紹介されている。邦訳書の巻頭「訳者の言葉」(大槻憲二)によれば、「原著者アンドレ・モーロアはフランスに於ける英国研究家として世界的に著名であり(中略)、本書は原著者の本領を最も全的に発揮した代表的著作の一つ」とされ、また「前大戦前後から今次の世界大戦に至るまでの世界人の精神は種々の苦悶と葛藤に悩んだ」が、その「代弁者」として「九大英文豪たちがそれを如何に体験し如何に表現してゐるかを知ること」を本書の主眼としているという(6頁)。中島がこのモーロア著の英訳本に触れた経緯は不明だが、とりわけチェスタトンを論じた章からの抜粋が他に比べて明らかに多いことから、中島にとっても最も興味を引く作家であり、また内容であったことが推察される。

こうした中島のチェスタトンへの傾倒は、折しもR・L・スティーヴンソン(1850-1894)ら同じ英作家への関心が高まっていた時期とも一致する。本書への関心は、中島の創作意欲を引き出すことになり、やがてスティーヴンソンのサモア行を題材とした「ツシタラの死—五河荘日記抄—」(後に「光と風と夢」へと改題)執筆の動機へと結びついていったのではないだろうか。

なお上掲の邦訳書『詩人と予言者』は、その書名から1936年の英訳本、すなわちANDRÉ MAUROIS著(HAMISH MILES訳)『POETS AND PROPHETS』(CASSELL & COMPANY LIMITED: London, Toronto, Melbourne and Sydney)を底本に邦訳されたものであろうか。ただし、その前年の1935年に(書名の語順が異なるものの)ほぼ同じ内容と思われる英訳本、すなわちANDRÉ MAUROIS著(HAMISH MILES訳)『PROPHETS and POETS』(HARPER & BROTHERS PUBLISHERS: New York and London)がすでに出ていることから、後述するように、この1935年刊の英訳本が中島の所見本であり、「ノート第十一」の抜粋元となった原書であろうと推定している(筆者が確認したところ、1935年の刊本も1936年の刊本もタイトルが異なるだけで、多少の異同はあるものの内容はほとんど同じであると思われる)。

したがって、中島の「ノート第十一」の最後に付記された「Prophets & Poets.」とのメモ書きは1935年刊行本の書名であり、また「A. M.」と

略記されている箇所は著者アンドレ・モーロア (André Maurois) のイニシャルとみて差し支えないであろう。ちなみに「ノート第十一」における中島の抜粋は、まずハックスレイの章の「VI THE “BOVARYSME” OF HUXLEY」から『恋愛対位法』の本文を書写することから始まっている。続いて、チェスタトンの章よりかなりの分量が引き写され、さらにコンラッドの章から (ただし、ポアンカレの文章に係る一節のみ)、そして最後にロレンスの章 (ハックスレイに関わる一節を含む) から写されているが、それらはチェスタトン関連の抜粋量と比べると明らかに少ない。このことから中島は、当時チェスタトンに対して他の作家以上に強い関心を抱いていたものと思われる。まとめると、「ノート第十一」はモーロアの英訳書のうちハックスレイ、チェスタトン、コンラッド、ロレンスを論じた各章から要所が順に抜粋されたものであり、それらが連続して筆記体で写された英文抜書集であるといえよう。

繰り返せば「ノート第十一」の内容は、冒頭よりハックスレイの章からの抜粋に始まり、チェスタトンの章、そしてコンラッドの章よりポアンカレの一文のみが抜粋され、最後のロレンスの章からはハックスレイと関わる一節他が書き抜かれたものといえる。注意すべき点は、抜粋の大半を占めるチェスタトンの部分は、なぜかチェスタトンの名前、書名等が故意に省かれていることである (こうした抜粋の形態が、おそらく「ノート第十一」がハックスレイ「恋愛対位法」ほか英文抜書集とされてきた理由であろうか^⑦)。中島はモーロアの英訳書から抜粋する際に、チェスタトンの名前 (以下の引用中では**太字**で示した) をすべてにわたって省きながら抜粋するなど、不可解な姿勢も見られるが、いずれにしても「ノート第十一」では、ハックスレイよりもチェスタトンに対する強い関心があったものと思われる。こうした点からも中島の韜晦したチェスタトン受容のありようが指摘できるのである。

3. チェスタトン『Orthodoxy』との関連から (1)

では、以下にアンドレ・モーロアの英訳本『PROPHETS and POETS』(1935) に収録されたチェスタトンの章「IV. G. K. Chesterton」より、中島が抜粋した箇所 (モーロアが評論『Orthodoxy』の要所を引きつつ同書の内容を紹介した「IV ORTHODOXY」の項) を確認していく。まずモーロアは巻頭の「Introduction」の中でチェスタトンについて、次のように述べていることに着目したい。

In his view, true progress would be found, not in the artificial creation of new and abstract institutions, but in a return towards

the essentially human institutions and beliefs of the Middle Ages.
(p.xvii)

(彼の意見に依れば、真の進歩が発見されるのは、新しい抽象的な法政を人為的に創造することにあるのではなくて、人間的なものを根本とする中世の法政と信仰とに復帰することにある。「緒言」5頁)

こうした概観のもとでチェスタトンの思想的な特質を見てとるモーロアの本書のうち、どの部分を中島は抜粋していたのか。同一段落等における抜粋の前後を含めて、抜粋しなかった部分も網掛けで示すことで、中島のチェスタトンに対する向きあい方の詳細が浮かび上がってくると思われる。また、原文の波線部分に対する中島の記載（誤記や追記、削除なども含む）を直後の（ ）内に挙げた。下線を施した部分は、「山月記」など、以後の中島文学の内容と関わりが深く、重要であると思われる箇所である。なお掲載した英文には、邦訳『詩人と予言者』（「G・K・チェスタトン」の章より「(四) 正教論」の項）から対応する部分の訳もあわせて付した（この訳書は中島が「ノート第十一」に抜粋した後に刊行されたものと思われるが、発行年月日から南洋パラオからの帰国後に実際に閲覧するなどした可能性もあることを付言しておく）。

(抜粋部分)『PROPHETS and POETS』(1935)

What philosophy had Chesterton thus rediscovered? It may be sketched in brief outline.

First: Reason, as an instrument of thought, is admirable, provided that its material is taken from reality. If it works in the void, it turns to madness.

"Poets do not go mad; but chess-players do . . . when a poet really was morbid it was commonly because he had(s) some weak spot of rationality on(in) his brain. Poe, for instance, really was morbid; not because he was poetical(削除), but because(削除) he was specially analytical. . . .(削除) The madman is the man who has lost everything except his reason." A lunatic's explanation of something is in a certain sense rational and satisfying; but the lunatic is confined within the clear,

(参考)『詩人と予言者』(1941)

チェスタトンが斯うして再発見したのはどんな哲学であつたか。簡単なアウトラインをスケッチして見たいと思ふ。

第一に、思想の道具としての理性は、その材料が現実取材される限り、立派なものである。空虚な所に働けば、理性は狂気となる。『詩人は気違ひにならないが、将棋指しは気違ひになる。……ある詩人が実際に病的であつたならば、それは彼の頭脳に何処か合理性と言ふ弱点があつたからである。例へばボウは実際に病的であつたが、それは彼が詩人的であつたからではなく、彼が特に分析的だつたからである。……狂人とは、理性以外のすべてを失つた人である。』狂人が何物かを説明する時、その説明は或る意味に於て道理に協つた、満足な説明である。併し狂人は或る一つの理念と言ふ明瞭に限定された牢屋に押し込められてみて、健全な人の複雑さを欠いてゐる。健全な人は肉体を通じて生きるものであつて、然して抽象的な理念が

exact prison of one idea, and lacks the complexity of a healthy being. A healthy being lives through the body, and it is in the body and by virtue of the body that abstract ideas lose their importance and their danger. (pp.163-164)

その重要性と危険性を失ふのは、肉体に於てゞあり肉体の力に依つてゞある。(157頁)

中島はこうしたモーロアによって Chesterton 『Orthodoxy』の原文が引用された本文を抜粋していたのであり^⑧、おそらくその作業と前後して『Orthodoxy』の原書も手に入れ、同書の内容全般にわたって理解を深めていたものと推定している。ここで中島は「he had(s) some weak spot of rationality on(in) his brain」(彼の頭脳に何処か合理性と言ふ弱点があつた)といったモーロアによって直接『Orthodoxy』から引用された一節を、引用符を省いて書き写していると同時に、「the lunatic is confined within the clear, exact prison of one idea, and lacks the complexity of a healthy being」(狂人は或る一つの理念と言ふ明瞭に限定された牢屋に押し込められてゐて、健全な人の複雑さを欠いてゐる)などの『Orthodoxy』の内容を要約したモーロアの文章もあわせてほぼそのまま抜粋している。こうした内容からは、たとえば「山月記」において「詩家としての名を死後百年に遺さう」(『全集1』22頁)とした主人公・李徴の漢詩に対して、「欠ける所」(『全集1』26頁)を指摘した旧友・袁修像の造型に際してなど、中島に大きな影響を与えたと推測できる表現もみてとれる。次に挙げる一節においても、中島文学の表現との結びつきが同様に指摘できる。

Now, m(M)odern thinkers are admirably gifted with the power of reasoning, but are very limited in common sense. They do not think of the real, solid things of life, of struggling peoples, of the pride of mothers, of a young man's first love. They are above and beyond these realities, in a realm of abstract words. If they forced themselves to write only in words of one syllable, in concrete terms, most of their ideas would be inexpressible. Materialism, for instance, is a mental aberration;(;) it denies the evidence. I

所で現代の思想家達は、理性する力には非常な才を恵まれてゐるが、常識に於ては非常に局限されてゐる。彼等は人生の本当の、地についたものを考へず、互に争ふ人民を考へず、母の誇りを考へず、若い者の初恋を考へない。彼等は斯うした現実を超越して、抽象的な言葉の支配する世界に住む。もし無理に平易な言葉、具体的な用語許りを使つて書いたならば、彼等の理念は大部分表現し得ないであらう。例へば唯物論は一つの心理的錯行であつて、証拠があつてもそれを認めないのである。思想や靈魂を頭脳の活動で説明しようとするが、出来ない。若し唯物論にして些少なりとも常識を持つてゐた

seeks to explain thought and the soul by actions of the brain, but cannot; and if it had the slightest measure of common sense, it would understand that the spirit, which contains everything, could not be itself entirely contained in one of the little agglomerations of matter which it contains. (p.164)

ならば、すべてを包含するものである所の精神が、その包含するいろ／＼なもの、小さいかたまりの一つに包含され切つてしまひ得ることはない筈だと悟るであらう。(157～158頁)

上掲の「They are above and beyond these realities, in a realm of abstract words」(彼等は斯うした現実を超越して、抽象的な言葉の支配する世界に住む)といった一文は、直接的には現代思想家たちの「Materialism」(唯物論)的立場を批判する文脈において語られたものであるが、「山月記」の李徴の人物造型とも一致する内容である。以上からも、中島は「山月記」の構想・執筆にあたり、「ノート第十一」の抜粋を介したチェスタトンの『Orthodoxy』の内容に対する強い共感を自らの文学表現に組み込んでいった可能性が指摘できよう。

4. チェスタトン『Orthodoxy』との関連から(2)

ところで、筆者はかつて「山月記」をチェスタトンとの関連から解釈し、「理性のみに立脚する「唯物論」的な考え方(中略)に憑かれた知識人の姿と末路を諷刺した小説^⑨」として読んだことがある。そうした登場人物像と行く末は、「山月記」と同じ〈古譚〉の中の短篇「文字禍」に登場する老学者ナブ・アヘ・エリバ博士の姿と末路とも重なり合う。彼の「本物」(＝現実)から遊離した「文字」(＝「影」)の抽象的世界に生きる姿は、「詩家としての名」を欲して「詩」に取り憑かれた「山月記」の李徴はもとより、「埃及文字」が突然読めるようになるという「木乃伊」のパリスカスの人物像や結末においても共通要素としてある。また「現実」と不即不離の関係のうちに「空想物語」を紡ぐ「詩人」の悲劇的最期までを描いた「狐憑」の主人公シャクの造型とその運命のありようとも響き合うものである。

次に挙げる中島の抜粋箇所は、モーロアがチェスタトンの『Orthodoxy』の本文を引きつつ、「唯物論」に席捲された「the real world」(実世界)を相対化する一つの視点として、チェスタトンが「the fairy world」(お伽話の世界)を重視していることを指摘した一節である。以下非常に長くなるが、チェスタトンとの直接的な関わりが示されているため複数引用させて頂く。

Now, amongst the traditions of every human society, a foremost place is held by fairy-tales. Every human life starts with belief in the world of fairy-tales, and this shows that the belief is a real need. And it may well be that the fairy world is simply the real world. What are its rules? First and foremost, that there magic is a possibility. Cinderella's godmother can change the pumpkin into a coach and the mice into horses just as, in the real world, the acorn turns into an oak and the egg into a bird. The materialist will retort that this is quite different, that the real world has its fixed laws. "But is it any the less magical for that?" Chesterton will reply. "All the towering materialism which dominates the modern mind rests ultimately upon one assumption; a false assumption. It is supposed that if a thing goes on repeating itself it is probably dead; a piece of clockwork. People feel that if the universe was personal it would vary; if the sun were alive it would dance." (pp.166-167)

さて、すべての人間社会の諸因習の中、第一の地位はお伽話に依つて占められる。人間の生活はすべてお伽話の世界を信ずることに始まる。これはその信ずることが本当の必要から生れたものであることを示す。お伽話の世界が実際の世界に他ならぬと言つても無理のない事である。その定則は何かと言ふと、何よりも先づ、お伽話の世界に於ては魔術があり得る事だといふことである。シンデレラの名付け親が南瓜を馬車に変へ鼠を馬に変へることが出来るのは、実世界に於て団栗が樫の木になり卵が鳥になるのと同じである。唯物論者は言ひ返すであらう、それは全然話が違ふ、実世界にはきまつた法則があると。『併し法則があるからと言つて、そのために少しでも魔術的でなくなるであらうか』と Chesterton は答へるであらう。『現代人の思想界に聳然と君臨する唯物論は、結局する所皆或る一つの仮定——それも誤つた仮定の上に安んじてゐるのだ。或る物がその行ひをいつまでも繰返して行くと、その物は多分死物だらう、時計仕掛のやうなものだらうと思はれるのである。宇宙が個性を有するものなら変化があるだらう、太陽が生物なら踊るだらうと人は考へるのである。』(159～160頁)

注目すべきは、こうした中島による抜粋部の直前には、「お伽話」の具体例に加えて「人間の生活はすべてお伽話の世界を信ずることに始まる」という Chesterton の主張（概要）が明記されていることである。また、造物主たる「神」によって万物が生かされてあることを、身近な自然現象を例にとって説明した部分も、中島にとって興味深い内容であつたと思われ、次のように抜粋を続けている。

"The sun rises every morning." says Chesterton. "I do not rise every morning; but the variation is due not to my activity, but to my inaction. . . . It might be true that the sun rises regularly because he

『太陽は毎朝昇る。』と Chesterton は言ふ。『私は毎朝は起きない。併し私が起きたり起きなかつたりの変化があるのは私の活動性に基くものではなく、私の無活動に基くものだ。……太陽は昇ることに飽きないから規則正しく昇る

never gets tired of rising. His routine might be due, not to lifelessness, but to a rush of life. . . . It is possible that God says every morning, '("Do it again,)' (") to the sun; and every evening, '("Do it again' to the moon. It may not be automatic necessity that makes all daisies alike; it may be that God makes every daisy separately, but has never got tired of making them.』 (p.167)

のだといふことも或は本当であるかも知れない。太陽の日課は生命のないことに基くものではなく、生命の衝動に基くのかも知れないのである。……神が毎朝太陽に「又やれ」と言ひ、毎夕月に「又やれ」と言つてゐるのだといふことも、あり得る。雛菊が皆互に似てゐるのは自動的な必要のためではないかも知れない。神が一つ一つの雛菊を別々にこしらへて、それでもこしらへるのに決して飽きないであるのかも知れない。』(160頁)

こうした抜粋部分における「a rush of life」(「生命の衝動」)などを「神」の決して飽くことのない意思そのものであると肯定的に受けとめる Chesterton の姿勢は、そのまま中島の「山月記」における「超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪まうとしなかつた」(『全集1』24頁)という袁孝像の造型へと流れ込んでおり、ひいては「山月記」のみならず〈古譚〉四篇の登場人物に通底するモチーフの一つともなっていたのではないかと(ちなみに〈古俗〉二篇(「盈虚」「牛人」)を〈古譚〉四篇の世界と比較した場合、明らかに人間の〈運命の暗さ〉のようなものに焦点化されており、ややテーマが異なっているように思えることから、やはり執筆時期に多少の相違があったのかもしれない。慎重な検討を要するが、〈古俗〉二篇は中島がパオロから帰国した後に構想・執筆された可能性も指摘できようか)。

なお、ここでも原書の中に Chesterton の名前があつたが、書き写す際に省かれている。アンドレ・モーロアの英訳書からの抜粋の過程で、中島は明らかに Chesterton の名が記された部分や Chesterton の『Orthodoxy』原文からの引用を示すダブルクォーテーション(引用符)を、ほぼすべてにわたり省いていることはあらためて注目される。こうした抜粋方法の徹底からも、中島の韜晦的な Chesterton 受容のあり方が垣間見えよう。

中島はさらに、次のようにモーロアが「現代思想」と「人類の因習」の両者が競合する点として挙げた場面も引き写していることは非常に興味深い。

A second point at which modern thought clashes with the tradition of humanity is the supernatural sense of boundaries and strict conditions. In fairy-tales there are always rules which limit the actions of mankind. (—) You cannot live with

現代思想と人類の因習とが衝突する第二の点は、境界及び厳格な条件に対する超自然的観念である。お伽話では常に人間の行動を制限する定則がある。……王女に玉葱を見せない限り、彼女と一緒に暮すことは出来ない。斯うした定則や条件は理由を説明されない。……何故私

the king's daughter unless you show her an onion. . . . These rules and conditions are not explained. . . . Why should I leave the ball at midnight? Why can you stay there until midnight? This dialogue is a symbol of life, the dialogue between M(m)an and God. It is, in a different form, the same dialogue that we overheard in *The Man Who Was Thursday* between creature and Creator. "Why am I sometimes unhappy?" asks the man. "Why are you sometimes happy?" might be the answer to him. And to both questions the reply is the same—that such are the conditions laid down for you. Now, in the books of Wells and many of the moderns these conditions disappear. Man becomes a god. But this is fallacious: man is not a god; man must respect the conditions of the fairy world, which is also the human world, and it is well that things should be so. (pp.167-168)

は夜十二時に舞踏会から帰らなければならないのですか。何故お前は十二時まで居られるのか。この問答は生命の象徴であり、人と神との問答である。(訳者註・シンデレラの話参照)それは赤別の形式に於て、我々が『木曜日だった男』の中で立聞きした、造物と造物主との問答と同じものである。「私は何故時々不幸なのか。」と人間が聞く。「お前は何故時々幸福なのか。」といふのが——もし答があつたら——答へかも知れない。そしてこの二つの質問に対して答へは同じである——それがお前に定められた条件なのだ、と。所でウェルズやその他多くの現代人の本の中では、此等の条件は姿を見せない。人は神になる。併しこれは嘘である。人は神ではない。人間はお伽話の世界の条件を尊重しなければならぬ。お伽話の世界は亦人間の世界でもある。物事に斯く条件が附加されてゐることは良いことなのである。(160～161頁)

このように「the supernatural sense」(「超自然的観念」)を重んじ、「人間はお伽話の世界の条件を尊重しなければならぬ。お伽話の世界は亦人間の世界でもある」といったチェスタトンの『Orthodoxy』などに展開された主張は、中島文学の成立過程できわめて大きな影響を与えたのではないだろうか。「ノート第十一」には「唯物論」的な現代社会の傾向を批判的に捉える内容が明らかに含まれており、それらが「超自然の怪異」譚としての「山月記」の執筆時にも影響を及ぼしていた可能性は否定できない。「山月記」をチェスタトンとの関連で解釈すれば、「唯物論」的な思想が席捲する同時代においては、元来「人間」が持ちあわせていた「超自然」的な考え方を受け入れる〈人間性〉が軽視され、とかく偏狭な「理性」のみに偏りがちな現代人の行き着く運命とその閉塞した世界のありようを諷刺した物語として読むこともできるのである。

5. チェスタトン『Orthodoxy』との関連から(3)

モーロア『PROPHETS and POETS』の内容で他に注目されるのは、

直接中島によって抜粋されていないものの「he accept the terms of the supernatural」(彼は超自然的なものゝ条件を受け容れたのである)などの一文である。中島文学を貫くテーマとの関わりが指摘できると同時に、あらためて李徴と袁彦という二人の対照的な人物が登場する「山月記」の成立に際して、「ノート第十一」における抜粋時に参照したと思われるモーロアの概説とその表現からの影響があった可能性も指摘できる。

Such were **Chesterton's** spontaneous feelings, he says; such were his intellectual needs; and in this way did **he accept the terms of the supernatural**. And so, when he encountered Christianity, he found that these ideas and needs, this joyful acceptance, fitted in wonderfully with his doctrine. "It was as if I had been blundering about since my birth with two huge and unmanageable machines, of different shapes and without apparent connection—the world and the Christian tradition. I had found this hole in the world: the fact that one must somehow find a way of loving the world without trusting it. . . . I found this projecting feature of Christian theology, like a sort of hard spike, the dogmatic insistence that God was personal, and had made a world separate from Himself. The spike of dogma fitted exactly into the hole in the world—it had evidently been meant to go there—and then the strange thing began to happen. When once these two parts of the two machines had come together, one after another, all the other parts fitted and fell in with an eerie exactitude." (pp.168-169)

※二重下線部については後述。

チェスタトンは言ふ、以上のやうなことが彼の心中に自然発生した感情であつた。以上のやうなことが彼の知識的要求であつた。そしてこの態度に於て、彼は超自然的なものゝ条件を受け容れたのである。それで、後に基督教に行き会つた時、彼は此等の理念、此等の要求、この喜びに満ちた受け容れが、彼の教義に実にぴつたりと適合することを知つた。「まるで私は生れてからその時まで、形の異つた、見かけ上何の関係もない二つの巨大な扱ひ難い機械——世の中と基督教的因習——を出鱈目にいぢりまはしてゐたやうなものだつた。私はこの世の中に一つの穴を発見した。それは、人は世の中を信頼することなしに世の中を愛する道を、何とかして探し出さねばならないのだといふ事実である。……固い杭が何かの様に凸出した、この基督教神学の特徴——神は(宇宙に遍在するものではなく)身体を持つたものであり、(宇宙即ち神ではなく)神自らとは別な一つの世界を造つたものだとする独断的な主張——を私は発見した。この独断といふ杭は世の中の穴にぴつたりはまつた——明らかに、この穴にはまるための杭だつたのだ——すると不思議なことが起り始めた。一度びこの二つの機械の二つの部分——杭と穴——が喰ひ合ふや、他のすべての部分が次々にぴつたりはまり合つて、気味の悪い程しつくり合つたのである。」(161 ~ 162頁)

こうした「超自然的なものゝ条件」としてのキリスト教の「神学」と世界との二者の対応関係に象徴される〈新たな認識の発見〉を綴った場面は、中島文学に大きな影響を与えている(「幸福」ほか)。それ以外にも、「山月記」

などの中島作品には『Orthodoxy』をはじめとする多くのチェスタトンの原書の内容との関わりが多数指摘できる。中島はモーロアの英訳書にとどまらず、『Orthodoxy』の原書全体の内容も踏まえながら、「山月記」「幸福」をはじめとする複数の作品を構想・執筆していったのではないだろうか。

この「他のすべての部分が次々にぴつたりはまり合つて、気味の悪い程しつくり合つた」という認識のありよう、すなわち以下のモーロアによって「one world」（「唯一つの世界」）の認識の下で「If you are bound up with this earth, you must love this earth」（この地球につながれてゐるならば、この地球を愛さねばならないのである）といった一文に集約されるチェスタトンの理念は、後に「光と風と夢」のスティヴンスンの内面、すなわち「やがて眼下の世界が一瞬にして相貌を変じた。色無き世界が忽ちにして、溢れるばかりの色彩に輝き出した」（『全集1』214頁）との一節にも表出し、外的世界の変化を前に、「一瞬の奇蹟を眼下に見ながら、私は、今こそ、私の中なる夜が遠く遁逃し去るのを快く感じてゐた」（215頁）との境地へ至る主人公の内面の帰結ともどこか響き合っていたように思われる。

Chesterton was never able to join the younger generation of his time in a general sense of revolt. To him, both optimism and pessimism seem absurd. Such general judgments on the world would be comprehensible if you could change your world as you change your house; but we have only one world, and we owe it a measure of loyalty. The primary patriotism is a love of the universe. If you belong to Hammersmith, you must not be for Hammersmith or against it: you must love Hammersmith. If you are bound up with this earth, you must love this earth. (p.168)

チェスタトンは、反抗といふ言葉の一般的な意味に於て、当時の青年層と意見を共にすることは決して出来なかつた。彼にとっては、楽観主義も悲観主義も共に愚劣なものに思はれるのである。世の中に対する斯うした一般的な判断は、人間が若し家を取り変へられる様に世の中を取り変へることが出来るものならば、筋の通つた話である。併し我々は唯一つの世界しか持つて居ず、之に対して或程度の忠節を捧げる義務がある。愛国心の最初のは、宇宙を愛することである。諸君がハマスミス（訳者註・ロンドンの一區）の住人なら、諸君はハマスミスの味方になつても敵になつてもいけない。ハマスミスを愛さねばならない。この地球につながれてゐるならば、この地球を愛さねばならないのである。（161頁）

同様に「To him, both optimism and pessimism seem absurd」（彼にとっては、楽観主義も悲観主義も共に愚劣なものに思はれるのである）といった抜粋部直前の一節は、「光と風と夢」におけるスティヴンスンの述懐、すなわち「人生とは、私にとって、文学でしかなくなつた。文学を創ること。

それは、喜びでもなく苦しみでもなく、それは、それとより言ひやうのないものである。従つて、私の生活は幸福でも不幸でもなかつた」（『全集1』195頁）という諦念の表現に直接影響を与えた可能性も指摘できる¹⁰。中島にとってチェスタトンの思想は、1936年以降の創作活動において不可欠な基底を成していたのであり、その後の作品のモチーフとしても渾然一体となっていたのではないだろうか。

以上で確認してきた通り、「ノート第十一」の抜粋元は1935年刊行のANDRÉ MAUROIS著（HAMISH MILES 英訳）『PROPHETS and POETS』（HARPER & BROTHERS PUBLISHERS: New York and London）で間違いないと考えられる。念のために翌1936年に刊行されたANDRÉ MAUROIS著（HAMISH MILES 英訳）『POETS AND PROPHETS』（CASSELL & COMPANY LIMITED: London, Toronto, Melbourne and Sydney）の本文と中島の抜粋部分を比較してみると、1936年本には「without apparent **connexion**」とあるのに対して、1935年本には「without apparent **connection**」と綴られ（前掲の二重下線部参照）、中島の「ノート第十一」における抜粋部分と同じ「**connection**」が用いられていることから、中島は1935年本を閲覧し、抜粋したものと推定している。

加えて、1936年本の巻末「ACKNOWLEDGMENTS」には、チェスタトンの著作として「*John Lane The Bodley Head Ltd. "Heretics," "Orthodoxy."*」（p.248）と挙がっている一方で、1935年本巻頭の「ACKNOWLEDGMENTS」（p.ix）には、「Dodd, Mead & Company」（出版社名）の項にチェスタトンの『Orthodoxy』他が挙がっている。この1935年本に記載された出版社名は中島の「手帳（昭和十一年）」記載の出版社名と同じであることから、やはり中島の所見本は1935年刊行のものであり、同「手帳」の記載は中島が抜粋と前後して『Orthodoxy』を入手する目的でメモしたものと判断して差し支えないと思われる。いずれにしても、中島の1936年頃からのチェスタトンの『Orthodoxy』に対する関心は並々ならないものがあつたことが窺えよう。

6. 中島文学への直接的影響について

最後に、あらためて先の抜粋前後の「楽観主義も悲観主義も共に愚劣なもの」であり、しかしながら「我々は唯一つの世界しか持つて居ず、之に対して或程度の忠節を捧げる義務がある」とする文脈に注目してみたい。既述のごとく、これらの内容は「光と風と夢」のスティヴンソンの内面とも響き合うものであることはすでに触れた。実際に、その部分に続く「光と風と夢」

の一節は、次のモーロアの「CONCLUSION」(「v」)の冒頭部が活かされた可能性もあるため、以下に引いてみたい。

THE capital sin of the past two centuries has been pride. Human intelligence, drunk with its own successes, has reached the point of ignoring the restraints of reality and scorning the traditions of the race. In the end it has imprisoned itself, like a larva, in a determination of its own secretion, in a web of its own weaving, and it has let itself be ruled by monsters of its own creation. Chesterton, with wonderful vigour and brilliance, has striven to reconcile intelligence with tradition. (p.172)

過去二世紀の最大の罪は、^{プライド}自恃であつた。自らの成功に酔つた人智は、現実の拘束を無視し、民族の因習を輕蔑する所まで来た。人智は遂に、蛹のやうに自分の分泌物で作つた繭の限界の中に、或は蜘蛛の様に自分の編んだ巣の中に、自らを幽閉し、自分の創り出した怪物に支配されて来た。チェスタトンは驚く可き精力と聡明さを以て、知性と因習を握手させやうと努めてゐる。(165頁)

こうしたモーロアによる総括(「(五) 結語」)にまとめられたチェスタトン評価——チェスタトンがバーナード＝ショーやウェルズに対する欠くことのできない「解毒剤」の役割を担っていたとする指摘——が中島のチェスタトン理解にも大きく作用し、かつ同時期に執筆された「光と風と夢」の世界にも投影されていたのではないか。たとえば「光と風と夢」における「私は蚕であつた。蚕が、自らの幸、不幸に拘はらず、繭を結ばずにゐられないやうに、私は、言葉の糸を以て物語の繭を結んだだけのことだ」と振り返り、「さて、哀れな病める蚕は、漸く、その繭を作り終つた」と綴るスティヴンスンの内面描写、すなわち「変形するのだ。蛾になつて、繭を喰破つて、飛出すのだ」との「友人」の言葉に答えて「しかし、問題は、私の精神にも肉体にも、繭を喰破るだけの力が残つてゐるか、どうかである」(『全集1』195頁)との疑念が兆しながらも、「習、性となつた・あの文字を連ねることの靈妙な欣ばしさ、気に入つた場面を描写することの楽しさ」をもとに「勇氣」をもって「変化」を迎えようとする場面へ、そしてスティヴンスン曰く「蛹が蛾となつて飛廻るためには、今迄自分の織成した美しい繭を無残に喰破らねばならぬ」(209頁)と書かれた場面へと直接活かされたのではないだろうか。

さらに「光と風と夢」の「一」の最後において、「白人文明を以て一の大きな偏見と見做し、教育なき・力溢るゝ人々と共に闊歩し、明るい風と光との中で、労働に汗ばんだ皮膚の下に血液の循環を快く感じ、人に喰はれまいとの懸念を忘れて、真に思ふ事のみを言ひ、真に欲する事のみを行ふ」(『全集1』107頁)というロビンソン・クルーソーと同じく「新しい生活」を

志すスティヴンスン像の造型に際しても、モーロアを通じたチェスタトン理解が色濃く反映されていた可能性も指摘できよう。

いずれにしても中島は、モーロアの1935年刊行の英訳本を読み、そこからの抜粋を通じてチェスタトンの『Orthodoxy』の原文と内容に触れていたことは間違いないと思われる。おそらくはそれと前後して『Orthodoxy』の原書も入手し、チェスタトンの思想に触れて理解を深めていたと推測される。もとより「山月記」全体を見てみると、モーロアの英訳書からの抜粋部分のみでは説明のつかない表現が多くあることから、中島は「ノート第十一」の抜粋をおこなった時期に、実際に『Orthodoxy』をはじめとするチェスタトンの原書も同時に手に入れていたと推定でき、そうした文学的な取り組み（抜粋と繙読）が「山月記」などの執筆の背景にはあったのではないか^⑩。この時期の中島の創作姿勢を垣間見ることができるとともに、チェスタトンの思想が「山月記」「光と風と夢」をはじめとする多くの中島作品の人物造型や主題において不可欠であった可能性が指摘できるのである。いずれにしてもチェスタトンの著作との関わりにおいて、中島は自らの文学を創り上げていったのであり、中島とチェスタトンの関わりは非常に密接であるといわざるを得ない。

このように見てくると、中島はアンドレ・モーロアの英訳書からの抜粋を通じて、そこに引用されたチェスタトンの『Orthodoxy』の本文を含むモーロアの要約や概説の内容から直接影響を受けていたことは間違いないと思われる。上掲の抜粋を通じてチェスタトンへの関心が（同時期のパスカル「パンセ」などに対する関心と並行して）より深まり、他の多くのチェスタトンの著作の入手と繙読が以降の作品執筆の動機と表現に結びついていたのではないだろうか。1936年頃からの中島とチェスタトンとの関わりを直接裏付ける英文抜粋集「ノート第十一」からは、中島文学が成立していく細部の様相が明らかに見てとれる。中島はチェスタトンの本文を通じて、その後の作品にチェスタトンの思想と表現を滲ませながら自らの文学を成立させていったといえよう。

おわりに

中島敦の「ノート第十一」は、フランスの英文学者アンドレ・モーロアの『PROPHETS and POETS』（1935年刊行の英訳書）から抜粋したものである。そのほとんどがG・K・チェスタトンの評論『Orthodoxy』についての項からであり、他の作家を論じた箇所と比べて『Orthodoxy』に関する部分からの抜粋が明らかに多い。これは中島と同書、ひいてはチェスタト

ンとの関わりがきわめて緊密であったことの証左であり、『Orthodoxy』の内容に対する中島の関心は非常に高いものがあったことがあらためて指摘できよう。

「手帳（昭和十一年）」における『Orthodoxy』の書名と出版社のメモ書きを考え合わせると、中島はチェスタトンの『Orthodoxy』を実際に入手して繙読したものと推察される。おそらくモーロアの『PROPHETS and POETS』から抜粋した時期と同じ頃に『Orthodoxy』の原書も入手し、読了していたのではないだろうか（その前後関係は現在のところ不明であるが、いずれにしても中島の『Orthodoxy』への関心はきわめて強いものがあったことは明らかであり、今後同書との関わりは一層重視されてよいと思われる）。中島がモーロアの『PROPHETS and POETS』におけるチェスタトンの『Orthodoxy』を論じた部分を、読むだけにとどまらず、書き写していたことを考えれば、少なくとも当時の中島にとっては創作意欲をかき立てられる内容だったことは間違いなく、自らの文学世界に一定の方向づけをもたらす素材として受容していたと思われる。チェスタトンの思想と表現がその後の中島文学の方法と展開を生み出していったのである。

とくにモーロアが『PROPHETS and POETS』のチェスタトン論の中で指摘した一節——「^{フライド}自恃」が蔓延る現代社会へ向けられたチェスタトンの批判的提言は、南洋の植民地サモアにおけるイギリス、アメリカ、ドイツの角逐を背景に、自らの生き方と文学とをめぐって内省を深めていく「光と風と夢」のR・L・スティヴンソンの心象風景にも直接活かされた。「明るい風と光との中」で「白人文明を以て一の大なる偏見と見做し、教育なき・力溢るゝ人々と共に闊歩」しようとするスティヴンソンの姿を介して、南溟の果てに文学による自己実現の可能性と、時代の困難のさなかに生きる〈人間〉の姿を追究する試みは、中島にとって太平洋戦争開戦前後の閉塞した社会に生きる文学者としての自己のありようを凝視する孤独な営みとも重なっていった。「光と風と夢」の掉尾における「新しい生活」がもたらしたスティヴンソンの精神的変容は、その意味で時代社会と自意識に触まれた作家・中島自身の〈変貌〉への憧憬のかたちでもあったのではないか。

以上のように、チェスタトンの『Orthodoxy』の内容が中島文学の形成とその後の展開に与えた影響の大きさは決して無視できないと考えられる。とくに〈南洋行〉前後の多くの中島作品には、チェスタトンの『Orthodoxy』などからの影響を窺わせる部分が遍在している。中島は自らの作品にモーロアを通じて獲得したチェスタトンの思想と表現も織り込みながら、一つの「地球につながれて」生きる人間の姿を繰り返し描いていった。1936年以降の中島文学は、そのように輪郭を現していったのではないだろうか。

今後の課題として、モーロアの『PROPHETS and POETS』に紹介された他の英作家と中島作品との関わりについて考えていきたい。

付記

中島敦の文章の底本は『中島敦全集』全3巻（筑摩書房、2001年10月、2001年12月、2002年2月）とし、引用は全てこれに拠った（『全集1』などと略記した）。引用の際は、原則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

-
- ① フランス語版『MAGICIENS ET LOGICIENS』（Paris: GRASSET, 1935）をもとに、ハミシュ・マイルズ（HAMISH MILES）の英訳により刊行された（HARPER & BROTHERS PUBLISHERS: New York and London, 1935）。中島の所見本であると推定している。
 - ② 拙稿「中島敦のG・K・チェスタトン受容―「山月記」「幸福」と『Orthodoxy』との比較から」（『別府大学紀要』第63号、2022年2月）、同「中島敦「光と風と夢」論―G・K・チェスタトン『Robert Louis Stevenson』との比較から」（『別府大学紀要』第64号、2023年2月）、同「中島敦「山月記」「木乃伊」ほか典拠考―G・K・チェスタトンの影響をめぐって」（『別府大学国語国文学』第64号、2023年3月）、同「中島敦「山月記」から「幸福」への展開―パラオの伝説とチェスタトン『Orthodoxy』を手がかりに」（『立命館文学』〈瀧本和成教授退職記念論集〉第685号、2023年8月）、同「中島敦「山月記」の授業実践に向けて―副素材による教材研究の試み」（『別府大学国語国文学』第65号、2024年3月）を参照されたい。
 - ③ G・K・チェスタトン著／南條竹則訳『詩人と狂人たち』〈創元推理文庫〉、東京創元社、2016年11月）。
 - ④ 拙稿「中島敦「名人伝」論―土方久功「パラオの勇者」との比較を中心に」（『全地球時代からの人文主義―歴史、文学、植民地教育史研究の環流（田中寛教授古稀・退職記念論集）』〈『新世紀人文学論究』第4号 特別記念号〉2021年3月）参照。
 - ⑤ なお引用は、G・K・チェスタトン著／中村保男訳『ブラウン神父の童心』〈創元推理文庫〉所収（東京創元社、2017年1月、新版）の本文に拠った。
 - ⑥ 岩倉具榮・金子重隆・大槻憲二共訳『詩人と予言者』（岡倉書房、1941年12月）。
 - ⑦ 財団法人神奈川文学振興会編集『DVD-ROM 版県立神奈川近代文学館

蔵中島敦文庫直筆資料画像データベース』（県立神奈川近代文学館および財団法人神奈川文学振興会発行、2009年6月）収録の「収録資料一覧データ」内の「資料名」の項には、「ノート第十一「恋愛対位法」（オルガス・ハックスリー作）ほか英文抜書集」とある。

- ⑧ なお註②に挙げた拙論中において、『Orthodoxy』の原書から中島が直接抜粋したとする意で記述した箇所は正確ではないため、ここに訂正をさせて頂く。
- ⑨ 註②の拙稿「中島敦「山月記」から「幸福」への展開—パラオの伝説とチェスタトン『Orthodoxy』を手がかりに」参照。149頁。
- ⑩ これと関連して、チェスタトンのスティーヴンソン論からの影響については、拙稿「中島敦「光と風と夢」論—G・K・チェスタトン『Robert Louis Stevenson』との比較から」（前出）を参照されたい。
- ⑪ 註②の拙稿「中島敦のG・K・チェスタトン受容—「山月記」「幸福」と『Orthodoxy』との比較から」（前出）を参照されたい。